



画家 小野寺 純一

今回の冬は異常に寒く、歳のせいかと思ったら、大寒気団がシベリア方面から日本列島を吹き荒れ、日本海側に大雪をふらせていると、テレビ天気予報のお嬢さんが話しておりました。ちょうどこんな寒さの昭和38年の大晦日、中華そば屋だった我が家も、年越ラーメンの出前で天手古舞、ちょうどNHK紅白歌合戦のころがピークで、三波春夫の「東京五輪音頭」や坂本九の「上を向いて歩こう」がテレビから聞こえ、寒さにふるえながら岡持ちを下げ、こたつでぬくもりながら年末を楽しむ家々に出前する、恨めしく思ったものです。

ですから60年もたった今でも、これらの曲を聞くと、その頃の情景が鮮やかに甦ってくるのでした。映画音楽もそうですね。大好きなジョン・スタージェスが監督した、黒澤明の「七人の侍」を西部劇に仕立て直した「荒野の7人」 ユル・ブリンナー、スティーヴ・マックイーン、ジェームズ・コバーンなどなど忘れられないカッコ良さ。そのバックに流れる前奏を聞いただけで、一挙に青年時代の頃に戻るのであります。というわけで、私的な思いのこもる音楽を、レコード、カセットテープなどにためこんで楽しんでおりましたら、MDなるものが出現しました。イメージとしてレコードはミゾをなぞる針が音をひろったり、テープはヘッドをこすって音を出したりするのは何となく理解できるのですが、MDあたりからデジタル方式とって、数字で記録されるにいたっては、遥かに想像をこえ、理屈はどうあれ機械にかけて聞くしか手はないわけです。ある日、新聞広告が目にとまりました



た。「今、あなたの持っている大切なレコードやテープは、劣化して聞けなくなるので、その前にパソコンなしでデジタル録音で保存しておきませんか」との言葉に焦りを感じ買いました。その名も木製 WCD・マルチプレーヤー、パソコン不要が効いて、届くとさっそくやってみました。できたんですが曲間のタイミングをほったらかしでできるものではなく、録音時間しっかりつきあわないとできないことがわかり、これまた不自由なんです。ともかく高額製品故に時間をみつけてはせっせと楽しんでやっておりました。

そんなある時、同窓会の懇親会で少し得意気に話していたところ先輩から、俺のレコードやるからと申し入れがありお引きとりしました。ところが世間では断捨離が流行っておりまして、私の趣味をききつけた友人から、どっさりレコードを引きとるはめになりました。せまい仕事場もさらにせまくなり、どうしようか思案しております。冷静になって考えてみればレコード・テープの劣化はすぐにおこるものではなく、あわててデジタル化しなくてもよかったのではと思うこのごろであります。録音騒動も一段落した我がマルチプレーヤーも、手もちぶさたにひっそりと、仕事部屋のかたすみにあります。